

多自然川づくり取り組み事例

タ イ ト ル : ぼくらの川★生き物助け隊! ~瀬名新川・水辺の小さな自然再生~		
水系 / 河 川 名 : 巴川水系 / 瀬名新川		河 川 分 類 : 都市河川
河川の流域面積: 0.93km ²		整備計画流量: 18m ³ /s
事 業 : 維持管理		セグメント: 2-2
事業開始年度: 令和5年度		
目 標 設 定 : 定性的		段 階 : C(モニタリング・評価時)
課題・目的(主な): 流下能力の確保、貴重種、特定動植物の保全、水際域の保全・再生・創出		
工 法 (主 な) : 掘削(河床)、置土(土砂投入)、その他		
配慮事項(主な): 河川景観への配慮、人材育成、その他		

背景・課題、目標設定

<背景>

二級河川瀬名新川は、40年ほど前まではゲンジボタルが舞う川であったが、国1バイパス整備による付替え工事により、両側コンクリートブロック護岸、河床に根固めブロックを敷設したため、大幅に生き物が減少した。しかし、徐々に土砂が堆積し、水生植物が復活することでカワナナなどが生息、ハグロトンボなど清流を好む生き物の生息が確認され始めた。また、橋梁との取合部は捨石工としたため、河床の変動により、淵の形成や、多様な生物が見られるようになった。

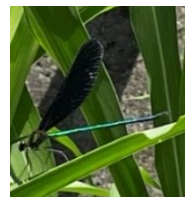
<課題>

毎年除草は行っているものの、抽水植物の繁茂や河床堆積により流下断面の確保のため河床掘削工を行うことになったが、河床掘削を行った場合に、既存の生き物の生息域が喪失する可能性があり、また、除草対象の中にはミクリなどの希少植物も含まれるため、保全が課題となる。

また、県では多自然川づくりの工事はできるが、その後の継続的なモニタリング調査や順応的な管理は県職員ではやり切れないため、流域住民の参加が望まれるが簡単ではない。

<目標>

従前の在来種の保全と復元、外来種であるアメリカザリガニやウォーターマッシュルームなどが減ることを期待する。また、流域住民が生き物調査や寄せ石等の自然再生に参加することにより、将来の多自然川づくりの担い手となる小学生、中学生、高校生、大学生に多自然川づくりのスキルをつけてもらい、継続的な取組とする。「多自然川づくり基本指針(令和6年6月改正)」5. 人材育成 6. 情報発信(地域住民や川づくりに関わる者のさらなる参画)



取り組み内容・対策例(1/2)

工事前に貴重種(静岡県では準絶滅危惧種)であるミクリを地元中学生がマーキング及び種採取。工事で残した。

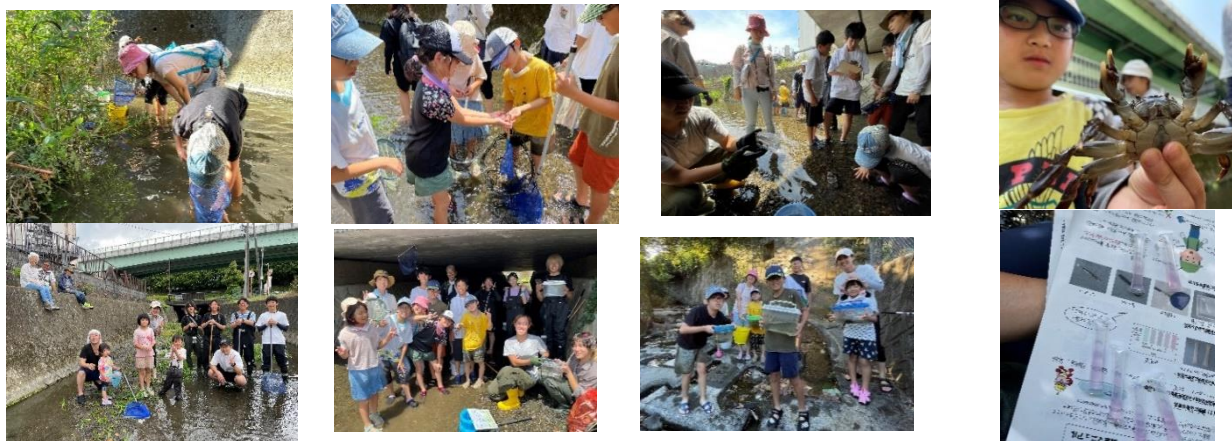


また、工事に出てきた玉石は処分せず、寄せ石とするようにした。寄せ石はその後、地元の人たちで、生き物が棲みやすいように並び替えた。→水辺の小さな自然再生



取り組み内容・対策例 (2/2)

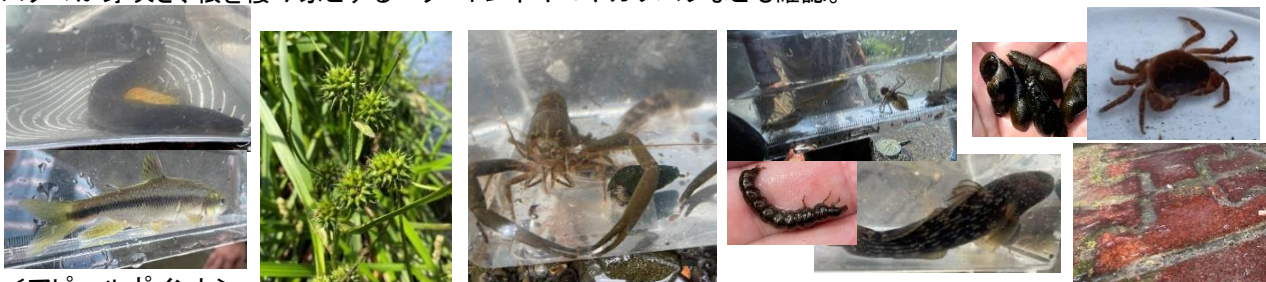
小学生～大学生を中心としたメンバーで事前調査1回、事後調査を6回実施。これまでの参加人数はのべ72人。
→若いメンバーや子どもたちに多自然川づくりを教える→多自然川づくりの担い手育成に！



モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

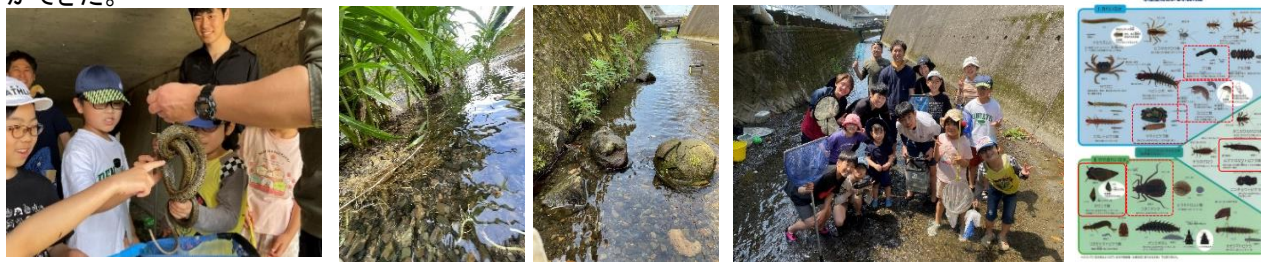
＜モニタリング結果＞

工事直後、生物や植物はほとんど見られなくなった。泥質土砂を除去したことで、砂礫の川底に変わリアメリカザリガニや外来植物が減った。最初にかワニナが復活。その後、従前のヌマチチブ、ヨシノボリ類、モクズガニなども玉石の下に確認できた。50年ほど見られなかったテナガエビやニホンウナギ、サワガニ、トビケラ類が生息が確認され、ジュズダマが芽吹き、根を棲み家とするハグロトンボヤゴやカワムツなども確認。



＜アピールポイント＞

土木事務所は限られた条件の中でできる範囲で多自然川づくりを行い、細かなところは地元の人たち、小学生、中学生、高校生、大学生に手を動かしてもらうことで地域の方々に川への愛着や多自然川づくりへの理解を深めることができた。



＜今後の対応方針＞

今後、水草の繁茂や土砂堆積などの要因により、水生生物が遷移していく可能性があるが、地域による調査を継続してもらい、結果を聞き、除草や河床掘削などを順応的に対応していく。

今回の地域の力を借りたちょっとした多自然川づくり(水辺の小さな自然再生)をモデルケースとして、市環境共生課、小学校、NPO、大学生などと継続的に連携し、他の河川でも進めて行く。

備考

問い合わせ先 静岡県 静岡土木事務所 河川改良課
電話番号 054-286-9363